

<特別寄稿文> たすけあいの心と共済

全国大学生協共済生活協同組合連合会
会長 濱田 康行

大学生協共済連は、大学生が組合員を代表する理事として運営に携わっています。その学生理事の胸の内にある「共済とは何か」「(大学生協)共済は何をめざすのか」といった疑問に応えるために、大学生協共済連会長濱田康行氏が行った挨拶に加筆修正した論稿をご寄稿いただきました。

改めて、「共済とは」について読者の皆様とともに考えてみたいと思います。<編集部>

<たすけあい>

人が困っている時、たいていの人は手を差し延べようとする。実際の行動にならなくても、助けたいと思う。「3.11」の時、全国から多くの人がボランティアとして現地に駆けつけた。自分たちの宿も確保されていないのに、また食べ物さえ不足するかもしれないのに、である。自分のことより、困っている他人のことを優先する。そう思って人々は行動したのである。

行動しなかった、あるいはしようと思ったけど、できなかった人もいる。テレビの前で惨状をみせつけられた人の多くは、助けに行きたい、役に立ちたいと思ったに違いない。

「3.11」は、人々と社会の意識の底に沈んでいた“他を思う心”を呼び覚ました。逆の言い方をすれば、私たちの心情の中には利他心が内在しているということだ。内在といったのは、普段はそれを内側に押し込めるもっと強い精神が私たち・社会を支配しているからだ。

資本主義という経済体制は、少なくともその骨格は、利己心で形成されている。自分の利益

を追求すること（もちろん公序良俗に反しない限りで）、それを神のみえざる手が調整して社会的（全体として）に最高の効率と成果が得られる。これがアダム・スミスの世界である。だから、私たちの社会では利己心が表に出て、他人を思う心は後景に退く。もちろん、これは経済活動の場面での話である。家庭の中では逆だろう。家族が全員、利己心で行動していたら、家庭は崩壊する。そもそも、家庭は成立していないだろう。相続の際にしばしばファミリー崩壊がおきるのは、利他心で調和的な世界に突然のように利己心が侵入してしまうからである。

大きな災害があると、人々は、“他を思う心”を思い出す。これは極めて自然なことだ。

<共済という制度>

共済が、“助け合う心”で組成されていることは明らかである。共済は組織の構成員にまず掛金という名称のお金を払って参加者（加入者）となってもらって成り立つ制度である。この拠出された掛金を共済金（保障）という形にかえてなんらかの災難に遭遇した人に給付するのである。お金には、価値を貯蔵する機能に加えて、必要な時に支払行為を完了する機能がある（支払手段機能）。共済はこの両機能をいわば利用するのである。

さて、話を少し戻してみよう。“他を思いやる心”がある。そうだとしたら、何事かがあって、ある人が困った事態になったら、その時点でその事を人々に知らせ援助を仰げばよい。なにも事前にお金を集めたり制度をつくったりしなくてもよいのでは。事実、「3.11」のときは、災害後

にボランティアが集結し、多額の義援金が長い期間かけて集まった。しかし、こういう状況は特別である。ある組織に属するある人が事故や病気であって困っているという小さめの集団を想定すれば、こうはいかない。いくつかの理由がある。

①困っているという情報がすぐには伝わらない。②事態は緊急であるかもしれないのに、救済の手は遅れる可能性が高い。③救済を受けた人の心理的抵抗が強い。③の要素はかなり重大である。資本主義のビジネス世界は等価交換が原則だが、社会には一方的な価値移転である贈与の占める場所が大きい。そして、一方的と書いたが、それはある時点間でそうなのであって、多くの場合、贈与には返礼がある。贈与を受けた側は返礼することでいわば解放される¹⁾。“人の世話になる”ことには案外に抵抗がある。

人々の親切心に頼って救済を事後的に行うと、事務的な仕事が必要となる。つまり事故や病気を発見して、それをしかるべき人々に知らせ、義援金にして当事者に渡す、という一連の作業の担い手も必要だ。

さらにもうひとつ問題がある。それは親切心、他人を気の毒にと思う気持ちから生じる。心持ちというのは、熱くなったり冷めたりする。一般的には時間軸に沿って気持ちは冷めていく。被災地では、これから人もお金も必要という時に、支援が来なくなるというのはよく聞く話である。支援の多くは持続性が必要なのであるが、親切心だけに頼っていたのでは、それが保証されないのである。

まとめて言えばこうなる。助け合うには事前の装置が必要だ。迅速性というのは事前に用意してはじめて保証される。ココロは大事だ。それは精神として不可欠だが、それだけでは行為にならないかもしれないし、その行為の持続性も保証されない。そのためには、ココロを制度にしておくことが必要だ。

＜お金の力＞

銭金の話は嫌いだという人がいる。ピュアー、

純粋な人、精神世界を大事にする人にとって、お金は敵なのかもしれない。こういう人々に言わせると、貨幣が世の中を悪くしたのである。そうかもしれない。人類の理想の世界ではお金は存在しないのかもしれない。

しかし、いかに純真な人でもお金を無視するわけにはいかない。誰でも、モノを購入するにはお金が必要だし、そのためには多少の貯蓄が必要だ。支払請求が来たら、その相手を納得させるにはお金で支払うことしかない。聖人はお金を扱わないが、その周辺には経理人がいるのである。

お金の力のひとつに接着力がある。お金は極めて無機質な接着剤である。お金を払って、どこかの会の会員になる。そうすると会の席につくことができる。そして、隣の席の人をはじめ多くの人と仲間になれる。お金など払わなくてもそれはできる！。そうかもしれないが、前者の型式には“自由”がある。関係を解消するには、お金を払わなければよい。多くの協同組合はこのお金の接着力を利用している。それは、拘束を嫌う自由な人々（資本主義での一般的な人物像）には好都合だからだ。お金は、人々を無機質に（感情抜き！）結合させる。そして、この接着剤で結合したものはいつでも簡単にはがれるのである。協同組合は入会も退会も自由である。出資金を払い、脱会に際しては払い戻しを受ければよい。もっともこの話の後段には、出資金は会計学上、資本なのか負債なのかという問題が内在している。

＜共済制度の本質＞

制度というのは枠組みである。その中に入ると、感情にかかわりなくある行動が生じる。この場合、その行動とは助け合いである。気持ちと行動の間には、場合によっては大きなギャップがあるが、制度はそれを埋める工夫でもある。

制度は、継続性を保証する。制度への参加者が多数になれば、それだけ制度は強化され、継続性は強化される。10人しかいない組織で1人が抜ければ、制度が保証している行動はできな

くなるかもしれないが、10万人となれば揺るがない。脱退は、確率的には必然であり、それ自体は止められない。だからこそそれを補充する拡大運動は必要であり、それが参加者（加入者）の信頼を大きくする。だから組織拡大は必要である。

貨幣で結びついた無機質の結合による制度は、参加者には“自由”を与えるが、組織には弱さを附与する。弱体を避けるためには、補充、そして拡大が求められる。こうした量的拡大という課題の他に、次のような質的問題もある。

制度は常にメンテナンスを必要とする。それは住居やオフィスの建物と同じだ。なぜ、そうかといえば、建物の外側の条件が長い間には変化する。雪国仕様から温暖化仕様に変るようなものだ。また、建物に住む人々のニーズも変化する。それに合わせて少しずつ改築していくのは建物の管理者の仕事である。

管理者の存在は必然だし、その能力は常に高いものが求められる。まず設計、そして緻密な計算の上で掛金が決まる。物的に無機質なお金を払い込むという行為があり、それによって人々の集合が結成される。しかし、ここではお金の性質を利用しているにすぎない。共済は“人を思う心”から出発しているのだから無機質な集団のままでよいはずがない。共済とはなんであるか？啓蒙活動は欠かせない。おそらく、民間の株式会社の保険と共済の違いは、この無機質性を放置するかしないかであり、共済でありたいなら、そのための方法が工夫されねばならない。そのための努力は事後的であって構わない。おそらく、事前にそれをする、結合自体が形成しにくいという問題が生ずるであろう。

お金の機能を利用していると先に述べたが、そのひとつの価値の保蔵機能に関連して、掛金の管理・運用という問題がある。預かったものを返すという考え方に徹すれば運用する必要はない。保管だけをしていればよい。しかし、貨幣経済下、特に紙のお金の時代にはインフレーションという困った現象があり、これに対抗しようとしたら運用を考えねばならない。物価上昇に対応するというのは共済の理念にもかなっ

ている。それは救う行為だから、それが可能な給付でなければならない。もちろん、給付額は加入に際して予定されており、その予定額で掛金は計算されている。物価上昇はこの“計算”を狂わせる。もっとも、ここで考え方は別れる。物価上昇はいわゆるマクロ的現象であり、ひとつの共済組合が作用を及ぼせるものではない。だから、この課題には何もする必要はない。そうでなくミクロ的に（個別に）対応するか。これはポリシーの問題だ。

同様な問題は利子率に関しても生じる。資本主義では各国、各時代に応じて、一般利子率と呼ばれるものがある。通常は銀行預金が想定される。銀行に預けておけば、“このくらい”の利子がつく。もしそうであれば、共済も自分の金庫でお金を保管するのではないから、一般利子率並みの増殖は可能だし期待できる。通常の場合、利子率はリスクの逆数である。だから銀行に不倒神話があったうちは共済は一般利子率を稼げる資産（短期なら銀行預金、長期なら国債）を持てばよかった。しかし、2008年の金融危機は神話を崩壊させ、そしてここ数年の先進各国の財政当局による（特に日本）の大量国債発行は第二の神話も危うくしている。つまり、運用問題は何もしなくてもよい課題ではなくなったのである。

貨幣の二番目の機能。つまり支払うという機能には迅速性が内在している。そのために、現金、およびそれに近い流動性を持つ状態で資産を保持しているのだから、迅速性を欠いてしまっては意味がない。参加者（加入者）は被害にあっているのだから、共済の管理者がそれを見出していくという努力・サービスも“迅速化”のひとつの要素である。迅速な支払いは努力目標ではなく必達の課題である。

<まとめ>

共済は人々がもともと持っている“他への親切心”を基にしている。それは、社会的動物といわれる人間の本質の一部である。だから共済は長い歴史を生き抜いてこれた。

しかし、心は行動ではない。救えるかどうか

は行動にかかっている。行動が必ず起こるようにする枠組みが制度である。心は揺れても制度は揺れない。自分が参加（加入）した制度の中で予定された行動が起きるのだから、それは自分の行動でもある。自分が救済されても、それは特定の誰かから贈与されたものではない。ここには、人を縛りつけるものがない。実はそうでないのだが、自分が自分を助けたと観念することも可能なのだ。つまり、利己的な想念にも反しない。

共済はよくできた制度なのだが、それを可能にしているのは貨幣の機能である。掛金として貨幣を集める。参加する側からすると貨幣を支払っていればメンバーになる。貨幣の接着力を利用して集団が形成される。それは貨幣がつくった緩い結合なのだが、共済では大抵の場合、次のふたつの理由から参加できる範囲を限定するのが一般的である。①参加者の経済的リスクがさ程に違わない。この方が仕組みが簡単だから。②貨幣の無機質性を克服し、人間の結びつきに発展させようとするときに、同質の人々を対象にしていた方がそれがし易い。

①も②も同質性という言葉で統一できるが、多くの共済はこれを条件にしている。JA共済連は、農業従事者、生協（コープ共済連）は都市の消費者層、全労済は働く人々、である。そして、この同質性で極立っているのは学生共済である。だから、どの共済が、貨幣による無機質結合から人間的結合へ前進しやすいかといえば、学生共済はその筆頭候補ということになる。

制度は管理者（元受団体）によって運用される。参加者（加入者）に善意者が前提されているように、管理者も善意である。株主はいないから、剰余は参加者に再分配するか制度の内部に残す。そのお金を使って制度の無機質化を克服し、より人の組織に近づけていく努力は王道である。それは未来社会をめざしうる組織の試みでもある。

別のところで述べたように²⁾、協同組織（共済もそのひとつ）は株式会社を代表とする営利企業とは違う。いわば船の構造が違い、乗組員のめざすもの、思いも少し異なるのだが、資本主義という海に浮いていることには違いはない

のである。組織の構造は異なっても、マーケットは同じだから必然的に競争は生じる。

歴史的には協同組織の船のほうが古いから、株式会社からみれば、前者は前近代的、19世紀的にみえるかもしれない。共済に相当するものを資本の世界に探せば、それは保険会社である。保険会社は金融業に属し、そこには資本主義の頭脳が、エリートが集まっている。そこから協同組織としての共済をみれば、大型ジェット機から小型のプロペラ機を、最新の新幹線からたった一両で走るローカル列車をみるようなものだろう。

しかし、株式会社が優れて見えるのは、それが資本主義に適合した組織形態だからである。資本主義の海にはそれはふさわしいのである。しかし、人類のどの時代でもそうであるように、すべて一色に塗りつぶされてしまうのではない。どの時代にも、支配的なものの他に、前の時代の置き忘れのような組織、そして未来を思わせる組織が少しずつ混じっている。さらに言えば、過去のものと思われる存在の中に未来があることもある。

『2012：協同組合』²⁾ で書いたように、2008年は資本主義の第3楽章の終わりを告げる年であった。この時を期して、資本主義の海はにがり始めたのである。私たち、人類はいつまでこの海に浮いていられるかわからなくなってきた。末期を示す現象は次々と現われている。それは別のところで書こう。もし人類が新しい海にたどりつけたとしたら、そこに浮ぶ船はどのようなものか。協同の船が航行に適している。そういう希望を持って、またその希望を実現するための現実的努力を怠りなく進みたい。

制度は、時代に合うように、そして人々・参加者のニーズに合うように常に改革されねばならない。その意味で共済の管理者は革新者であるべきだろう。

1) 贈与については、モース・M『贈与論』吉田禎吉、江川純一訳、ちくま学芸文庫、2009年。これは、この分野の必読書である。入門書として桜井英治『贈与の歴史学』（中公新書、2011年）がおすすめである。

2) 『2012：協同組合』大学生協共済連編、コープ出版、2012年。